

上越学生寮の終焉と上越市

しゅうえん

葛飾区 大滝恵三（大手町出身）

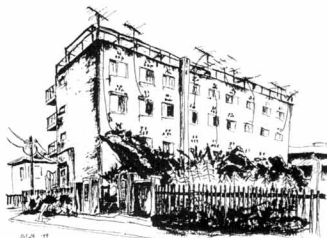
上越地方出身の男子学生に宿舎を提供し、幾多の有益な人材を輩出してきた上越学生寮は、平成十一年十二月、一世紀の歴史に幕を閉じたことは、ご存知の方が多いと思う。このJネットには尾崎宗秀副会長や水嶋晃監事はじめ多くの寮出身者が会員となっている。

閉寮前後から今日まで、何かと上越市との関わりが深く、その上越市とのパイプ役を務めてきた当事者としてこれらの経緯を報告したい。

寮の生い立ちから閉寮まで

明治三十八年、上越地方出身在京有力者や上越地方在住篤志家の寄付によって創立された上越学生寄宿舎は、本郷弓町（文京区本郷二丁目）時代四十数年、戦後中野区野方に復興して約十年、昭和三十

メドが立たなくなつて断念したということもあつた。



平成11年10月取り壊し寸前の金町寮（高野俊郎さんスケッチ）

上越学生寮奨学金制度発足

四年十月葛飾区金町に新築移転、戦団法人上越学生寮と名称を変えて約四十年の間、学生に寄宿舎を提供するという面だけではなく、共同生活による切磋琢磨の機会を与えるという大きな目的を持っていたが、近年、生活面の豊かさによって寮生活よりもアパート、マンション暮らしが可能となつたことや共同生活の意義を認めなくなつた風潮など、時代の変化によって入寮者が激減し、また寮建物の老朽化もあり、平成十一年七月の役員会で、寮の社会的役割は終わつたと認識し、閉寮、法人の解散を正式に決定し、また跡地三百坪は地元葛飾区に譲渡、売却資金は上越市に寄託して奨学金基金とすることも決定した。

なおこの二年ほど前、募金によつて新築して上越市に移管する案が決定したこともあつたが、経済状況の悪化で募金の

寮の土地の売却代金から解散に伴う経費を差し引いた二億円は、「上越学生寮奨学金」の基金として平成十二年四月上越市に寄託された。事務局は上越市教育委員会に置いてあるが、従来の上越市の奨学金とは完全に別扱いとして平成十三年度からスタートした。

とし、貸付金額は四大生月額七万円、大学院生十万円とした。受給者を選考、審査するための評議会は、寮のOB会・上越寮友会から松枝迪夫会長と古川辰弥副会長の二人が入っている。育英事業でもあつた上越学生寮は、今後も形を変えて継続することとなつた。平成十三年度第一回の受給者は、上越市出身四名、新井市出身一名、糸魚川市出身一名の計六名（うち女子三名）。平成十四年は、上越市三名、大潟町二名、妙高高原町一名の計六名（うち大学院生一名含み、女子は二名）。

跡地は葛飾区の防災公園に

閉寮が正式に決定するまでの数年間、紆余曲折があつたが、閉寮として跡地を葛飾区に譲渡する可能性が出始めた平成九年十月頃から、私の知り合いの有力な葛飾区議を通じて葛飾区側と打診、折衝をしていたので、閉寮が決定した時点で葛飾区との話は成立していた。

その内容は①公園用地として譲渡、②売買は国有地に準じて三分の一無償、三分の二有償、③公園は十四年度末までに開設、④公園内に「ここに上越学生寮ありき」の記念碑を区の負担で設置、⑤公園内に上越市の「木」とか「花」の植栽が可能、などであつた。

なお葛飾区とは、昭和二十年の終戦の頃、葛飾区から多くの小学生が上越地方に疎開したという経緯もあり、平成十一年十二月二十一日、葛飾区長との調印は終始和やかに行われた。

いよいよ本年度は公園開設の年、七月に入り葛飾区から私に「防災機能を持つ公園の計画案と見取図ができたこと、十一月着工来年三月完成」という連絡が入り、記念碑の材質の件や上越市寄贈の木、花の打診もあった。早速上越市と連絡をとると所轄は企画課であった。同課の三浦課長（Jネット事務局長）は閉寮当時の東京事務所長で、その経緯を良く知っていた。お陰で話はスムーズに進み、上越市からは、市の木である桜を一本、市の花である椿を三本の寄贈、記念碑の材質は、新井市原産の千草石を三浦課長が紹介、この方向で進んでいる。これらに要する経費は全て葛飾区の負担。公園の完成が楽しみ、待ちどおしい。つい先日上越寮友会の総会、懇親会が越後湯沢であり（田中弘邦上越商工会議所会頭も出席）、この件を報告したところ、金町寮出身者の有志は、公園完成時に寮跡地に集結することが決定した。金町寮卒一期生の私も当然参加することとなろう。